「慰霊の日を前に～憎しみを越えて～」

令和５年６月１９日

私が尊敬する先輩の教師が香港の日本人中学校に勤務していた時、「戦争」について学ぶ全校集会があったそうです。会場は体育館。多くの日本人が、ましてや日本軍の凶行により中国兵や中国の人民の命を奪った中国の土地での集会。「戦争」を学ぶ特設授業であるのに、私語が絶えなかったことにショックを受けたそうです。私たち沖縄で「戦争」という言葉に接した時、子どもたちはどのような態度を示すでしょうか。おそらく、何か大変なことと理解し、それなりの態度で講話などを聞くのではないでしょうか。「戦争」と言う同じ言葉に接しても違う態度を示す。私たち、沖縄に住み生きる者は、先人たちがつないできた「戦争」を憎み「平和」の大切さを知る心と態度を子ども達につないでいかなければなりません。昨今のウクライナや台湾を巡る報道を見ていると、「自国の防衛力の強化が他国からの侵略を阻み、平和を守る」論法が一段と強化され、我が沖縄でもそのような立場をとる首長もいます。「平和は武力でこそ守れる。」本当にそうなのでしょうか？世界各国で武力を背景に語る国の正義。国によって違う「正義」って何なのでしょうか？

今から８２年前、皇国の荒廃をかけ、真珠湾攻撃に打って出た日本。１９４１年１２月８日未明に「トラトラトラ」（我、奇襲に成功せり）の電報を打った真珠湾攻撃総隊長の淵田美津雄中佐（当時）は、鬼畜米英に燃え、自己の任務に対し米英との戦争に勝つことが「正義」と思っていたに違いありません。一方、真珠湾攻撃以来西太平洋上で戦果を拡大する日本に対し、逆襲に燃え、日本本土の空爆を敢行するドーリィトル空爆隊の班員にいたジェイコブ・デシーザーは、「リメンバー・パールハーバー」を胸にアメリカの正義に燃えていたに違いありません。（ドーリィトル空襲は、空母で日本に近づき艦上から爆撃機を発艦させる危険な作戦でした。爆撃後は中国に着陸する計画）デシーザーは爆撃後、中国に飛行しますが燃料切れの為着陸した場所は、日本軍が支配する地域。そのため、日本の捕虜となり過酷な体験をしました。戦後、二人は東京渋谷で奇跡的にめぐり逢います。「私は日本の捕虜でした」というパンフレット配っていたデシーザー。戦争や捕虜収容時の体験から、なぜ、人間同士がこうも憎み合うのかを考え続け「憎悪を真の兄弟愛に変えるキリスト教の教え」にあい、デシーザーはキリスト教に入信していたのです。人間の憎しみを考えていた淵田もデシーザーとの出会いもありキリスト教に入信します。二人の心を射抜いたのはルカの福音書二十三章三十四節「父よ、彼らを赦したまえ、その為（な）す所を知らざればなり」という処刑前に語ったキリストの言葉です。二人は「聖書」を介し憎しみを乗り越え人類愛に行きつきました。

以前、先生方に紹介した左の写真「焼き場に立つ少年」は、長崎原爆投下直後に、死んだ赤ちゃんを背負い、死体を焼く焼き場の前で順番を待っている少年の姿です。写真を撮ったのはジョーオダネル。原爆投下が正義とされるアメリカで彼は世間からの批判に負けず全米で原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを訴える運動を続けました。戦争の悲惨さ、愚かさを真に理解しているからこその運動です。ここに書いたのは沖縄戦のことではありませんが、私たち沖縄は、戦争を引き起こす憎しみを越えて、「命どぅ宝」の言葉が端的に表しているように、戦争の悲惨さ愚かしさを知る DNA が流れているのです。途切れさせてはいけません。先生方、平和の大切さを子どもたちに伝えて下さい。